

〔資料紹介〕

広橋家旧蔵「兼仲卿暦記 文永十一年」について

高橋 秀樹

はじめに

近年、鎌倉期の朝廷・貴族社会に関する研究が徐々に発表され、江戸時代以来武家一辺倒であった鎌倉時代史がようやく見直されつつある。それを支える重要な史料が貴族の日記類であることは言うまでもない。鎌倉中期の日記の中でも、とりわけ豊富な記事を有するのが、本館の「広橋家旧蔵記録文書典籍類」(資料番号H-63)の中に自筆本が伝来する藤原兼仲の『勘仲記』である(『岩崎文庫和漢書目録』<sup>1)</sup>にならい、本館でも文書紙背を利用した日次記の書名を『兼仲卿記』、具注暦を利用した暦記の書名を『兼仲卿暦記』としている。本稿では、便宜上、両者を総称する場合に『勘仲記』の名称を用いることとする。

『勘仲記』は、戦前、矢野太郎氏によって『史料大成』に翻刻され、現在でも『増補史料大成』本を容易に利用することができる。しかし、

その解題に記されている通り、当時、岩崎文庫に秘蔵されていた自筆本を閲覧することができず、東京大学史料編纂所所蔵の九条家蔵本の謄写本を底本とせざるを得なかったため、誤りが極めて多く、そのままの利用は憚られるほどと言つてよい。また、まったく未翻刻の巻、あるいは一部未翻刻の巻もかなり残されている。その代表がここに一部を紹介する『兼仲卿暦記』である。

一 書誌について

『勘仲記』の概略は、『増補史料大成』の解題のほか、『国史大辞典』の項目(新田英治氏執筆)、<sup>2)</sup>『日本「古記録」総覧』上巻の項目(森茂暁氏執筆)にも要領を得た記述がある。また本館展示図録『中世の日記』<sup>3)</sup>にも示唆に富む記述が多い。したがって、ここでは文永十一年の『兼仲卿暦記』にかかわる部分を中心に最小限のことのみ述べておきたい。

兼仲の日記は文永十一年(一二七四)正月から正安二年(一三〇〇)三月までの記事がある程度まとまった形で現存する。文永十一年以前より兼仲は日記をつけていたらしいが、文永十一年六月四日の勘解由小路亭火災で「抄物以下、愚記・細々書籍」は一紙残らず焼けてしまった。そのため吉田亭に携行していて被災を免れた文永十一年暦記以下が伝来することとなった。散逸して今に伝わらない部分も多く見られるが、それでもなお、二〇年以上に及ぶ詳細な記録は貴重で、とくにそのほとんどが自筆本の形で現存することも特筆される。その自筆本八三巻は本館

に所蔵されており、一九八八年には国の重要文化財に指定された。

日記の大部分は文書紙背を料紙として記されているが、これとは別に兼仲は具注暦に記した暦記も残しており、文永十一年(一二七四)正月一日～二月三十一日、弘安七年(一二八四)正月一日～二月二十九日、正応元年(一二八八)正月一日～二月二十九日、永仁二年(一二九四)正月一日～二月二十九日(現在は二巻に分巻)、正安二年(一二三〇)正月五日～七日(首尾欠)の五巻(現六巻)が残されている。このうち、文永十一年をのぞく四巻は、同じ年記をもつ『兼仲卿記』が自筆本または写本にあり、両者が並行的・補完的に用いられていたと見られる。ただ文永十一年暦記が裏書・切継紙を用いてしばしば詳しい記述を行っているのに対し、弘安七年・正応元年の暦記には裏書・切継紙がなく、記述も簡潔である点を考え合わせると、文永十一年については暦記のみが作成され、一方の『兼仲卿記』は作成されていなかった可能性が高い。ただし、暦記の記述によると即位儀などに関しては別記が作成されていた。

『勘仲記』の写本は、国会図書館や内閣文庫・宮内庁書陵部をはじめとする各所に所蔵されているが、いずれも『兼仲卿記』の写本であり、『兼仲卿記』の写本は現在まで確認されていない。

文永十一年の『兼仲卿記』(架蔵通番号八三〇)は卷子本一巻で、黒漆塗後補軸・縹地後補表紙がつけられている。表紙の題箋には「兼仲卿記自文永十四年正月一日至十二月卅日 自筆本 一巻」の外題があり、具注暦の巻首には「文永十一年具注暦日甲戌歳于本支土、納音是火 凡三百五十四日」と記され

ている。

法量は縦二七・六センチメートル、横一九二五・五センチメートルで、楮紙五一紙からなる。一紙ごとの横法量は以下の通りである(単位はセンチメートル、※は切継紙)。

1	三七・八	2	四一・二	3	四一・三	4	四一・三	5	四一・三
6	四一・三	7	四一・三	8	四一・三	9	四一・四	10	四一・〇
11	四一・四	12	四一・三	13	四一・五	14	四一・五	15	四一・四
16	四一・〇	17	四一・三	18	四一・三	19	四一・二	20	二一・〇
21	※二二・〇	22	※二九・六	23	三・三	24	※四一・四	25	※三〇・六
26	一六・二	27	四一・五	28	四一・四	29	四一・三	30	四一・四
31	四一・三	32	四一・三	33	四一・一	34	四一・三	35	四一・一
36	四一・五	37	四一・五	38	※四四・三	39	※四六・四	40	※二四・五
41	三四・〇	42	※二二・一	43	六・三	44	四一・五	45	四一・三
46	四一・五	47	四一・五	48	四一・二	49	四一・三	50	四一・一
51	二八・八								

料紙には文永十一年の具注暦(空行一行、界高二三・二センチメートル、界幅二・二センチメートル、横界にて縦を四格に分かつ)を用い、具注暦の空行に一・二行、一行あたり最長三〇余字の墨書をする。二行で書ききれない場合、数文字の時は左傍に書き添え、数行に及ぶ時は紙背を利用している。交名など詳細に記録する時には、具注暦の空行部分を切って反古を切り継ぐ。その切継紙に見られる紙背文書は写真を別に掲げた。

卷末の表から裏にかけて、目録を取った旨の子息光業の奥書が、正和五年（一一三六）・元亨元年（一一三二）・正平二年（貞和三、一三四七）の三度にわたって記されている（翻刻および別掲写真参照）。

## 二 内容について

文永十一年、兼仲は三一歳、正五位下治部少輔であつた。この年の『兼仲卿曆記』の記事内容について若干触れておこう。一部は紙背や継紙を利用してあるものの、原則として具注曆の空行に記すという制約から詳細な記事は少ない。しかし、まとまった他の日記が存在しない年だけに貴重であり、また興味深い記事も多い。

本記中最も大きな政治的事件は、やはり蒙古の襲来であろう。事件経過については『蒙古襲来絵詞』や『八幡愚童訓』の語るところに及ぶべくもないが、一〇月一八日条の第一報から一月六日条にかけて、京都で伝聞した現地の状況、武家の対応が記されている。またこの事件がその後の政治日程に大きな影響を与えていたこともわかる。この蒙古襲来関係記事については、八代国治氏が「蒙古襲来に就ての研究」の中で紹介され、いわゆる「神風」論争の一方の有力な証左となっている。この時点では貴族社会の末席を占めるに過ぎない兼仲が、外敵来襲の報を聞くやいなや「我朝神国也、定有宗廟之御冥助歟」（二二日条）と神国思想を持ち出している点は、貴族社会に関する限り、神国思想がある程度深く浸透していて、対外関係を強く意識したこの機会にそれが顕在化し

たことを示しているだろう。もちろんそれは黒田俊雄氏のいわれる通り、愛国心や民族意識によるものではない。<sup>(8)</sup>

このほか、龜山院政の開始、この時期に大きな影響力を持っていたといわれる藤原兼平の行動、摂関交替・藤原位子の入宮を左右した関東使者（東使）の上洛、諸莊園からの造宮料や関東からの成功任料を私用したあぐく住吉社造宮遅怠の科により解官された藤原経業の記事なども興味深い。

兼仲にとつての大きな事件は、父経光の死をにおいてほかにない。経光は第一線での活動こそ子息兼頼に譲つてはいたものの、室町院・円満院宮、近衛流摂関家への参仕は行つていた。とくに室町院では三〇余年にわたつて年預奉行を勤めており、近衛流摂関家でも「殿中之元老」として重きを置かれた存在であつた（四月一五日条裏書）。二月はじめには春日社参詣を行うなど元気な様子であつたが、四月七日より体調を崩し、出家の甲斐もなく一五日亥刻に逝去した。翌日の葬送は吉田亭を葬家として時衆の聖人の沙汰で執り行われ、経光の母禪尼、妻、子息・女子各二人をそれぞれ主催者とした追善仏事が催された。

経光の追善仏事や兼仲の家族の問題については別に論じたいと考えるが、ここでは墓地と家記をめぐる問題についてのみ指摘しておこう。

四月一六日条によると、経光の墓所は京郊外の吉田亭内に、いわゆる屋敷墓の形態で設けられた。屋敷墓と死穢とをどう整合的に理解するかについては、これまでの多くの研究が苦慮してきた。たとえば、屋敷墓は死穢を厭わない庶民の墓制であると考えたり、死者とそれを埋葬する

血縁者との間には死穢の観念は存在しなかったと理解している。<sup>(12)</sup>ところが、穢に対しては過敏で、墓参の日には出仕を控えた貴族たちも、邸宅内に墓所を構えることがあったのである。『明月記』嘉禄元年(一二二五)五月一八日条にも「入夜前大納言忠良卿薨、夜前葬送<sup>山中</sup>云々」と、家中(おそらくは郊外の邸宅敷地内)の山に埋葬されたことが記されている。

では、屋敷墓と死穢を切り離したものは何か。それは邸宅内の「別廊」に墳墓を構えるという空間的な区画であった。廊を隔てることで別の空間と認識されたことは次の『山槐記』の事例からも知られる。中山堂の一角に居住していた藤原忠親は数日前に伊勢例幣奉行の仰せを承った。行事の当日、彼は日記に「此亭中山堂別郭也、但有持仏堂、然而非堂舎儀、仏像・經典等自一昨日渡持仏堂也」と記している。持仏堂の有無にかかわらず、中山堂の一角でも「別郭」であれば、堂舎とは見なされなかった。後年、中山堂は忠親子孫の墓所だったことは明らかであり、<sup>(13)</sup>忠親が亡室の盆を中山堂に送っていることから、この時点でも既に中山堂に墓所があった可能性は高い。墓所をとまなう郊外寺院の一隅であつても、別廊であれば穢は伝染しなかったのである。

家君経光の死の悲しみのさなか、祖父頼資が造営し、経光・兼頼・兼仲で共用していた勘解由小路亭が焼失してしまった。七七日さえ終わらぬ六月四日のことである。文庫は焼失を免れ、文庫もほとんど運び出すことが出来たが、曾祖父兼光と祖父頼資の日記の半分余りと兼仲の抄物・日記などは失われた。邸宅の共用関係から見ても、この時点において

は、兼光・頼資の日記は兼仲個人が相伝していたのではなく、経光を「家君」とし、兼頼・兼仲兄弟を主たる構成員としていた「家」が所有主体であつたと考えられる。<sup>(14)</sup>三月二〇日には兼仲が吉田亭から「貞応大嘗会文書」を取り出しており、経光を家君とする「家」では、日記・文書・典籍類を吉田亭と勘解由小路亭とに分けて保管していたようである。難を逃れた兼光・頼資の日記半分は、勘解由小路亭から運び出せたと見るよりも、吉田亭に保管されていたと見た方が自然かもしれない。なお、祖父頼資の日記が自筆であるのに曾祖父兼光の日記が写本だったのは、経光が頼資の「家」の嫡子として日記原本を継承したのに対し、頼資は兼光の庶子として官途を遂げて家記を書写することで「家」を分立させたからである。<sup>(15)</sup>

文永一一年の段階では兼仲は家格相応の官途を遂げておらず、「家」を分立させてはいない。兼頼・兼仲で一つの「家」を形成しており、その中で役割分担が見られる。「家」の継承者である嫡子兼頼が弁官として朝廷に出仕して公事を勤め、治天の君亀山上皇にも仕えているのに対し、次子兼仲は室町院・近衛流撰閑家の奉行を勤め、自家領の沙汰などを担当している。四月一日、父経光の死をうけて室町院年預の地位や室町院領知行は新家君兼頼へと引き継ぐことが認められた。名目的には家君が「家」の長としてその地位にあり、家領の安堵を受けたが、公務繁多な兼頼に代わって実際には「家」構成員である兼仲が「家」を代表して主家への奉仕を勤めていたのである。兼仲の治部少輔任官が兄の譲任、従五位上への昇叙が室町院の御給だったのは、その代償のひとつで

あった。

兼仲が詳細な日記を残しているのに対して兄兼頼が日記を記していた証左がないこと、また、大量に頒布されたとは思えない具注曆を家君ではない兼仲が利用して日記を記している点も「家」の問題として考える必要がある。公事のテキストとして優れた内容をもつ父経光の『民経記』の継承を前提として兼頼は自ら日記を残さなかった可能性、家君経光が次子兼仲による「家」の分立に備えて兼仲に具注曆を与えて日記を書かせた可能性もないとはいえないが、南北朝期の『師守記』が局務を勤めた父中原師右・兄師茂のもとで家君である彼らの行動を記録していたことと軌を一にしていることも考えられよう。この点についてはあらためて考える機会をもちたい。

最後にやや微細なことではあるが、本記によって衣笠中納言と称された藤原経平の死没日の通説を修正することが出来る。『公卿補任』が五月七日と記していることから『史料綜覧』も五月七日の出来事として掲載し、『国書人名辞典』も五月七日説を採っているが、正月七日に薨じたと記している『尊卑分脈』の方が正しい。また、かつて鎌倉幕府の將軍の座にあった宗尊親王について『本朝皇胤紹運録』『將軍執権次第』は文永十一年七月二十九日に死去したと記しているのであるが、同じ後宇多天皇時代に成立した『一代要記』に八月一日とあることから、柳原紀光の『統史愚抄』や東京大学史料編纂所の『史料綜覧』も八月一日説を採り、近年の『国史大辞典』などの歴史辞典・人名辞典類もこれを踏襲している(『鎌倉年代記』『武家年代記』<sup>(20)</sup>は七月三〇日説を採るが、この年

七月三〇日は存在しない)。このように両説に分かれているのは、死没時刻が丑刻という日付けの変わり目だったためであった。

なお、本館所蔵「高松宮家伝来禁裏本」には、この年文永十一年にかかる記録として、『御幸始布衣記』一卷(室町時代写)、『豊明節会次第』一冊(江戸時代前期写)が含まれていることを付言しておく。

以上、筆者の関心に引きつけた簡略な紹介ではあるが、ここに翻刻した本記が広く利用され、鎌倉時代史研究・公家社会研究に寄与することがあれば幸いである。

## 註

- (1) 東洋文庫、一九三四年。
- (2) 新人物往來社、一九八九年。
- (3) 国立歴史民俗博物館、一九八八年。
- (4) 各所に文永五年の年記をもつ写本があり、『岩崎文庫和漢書目録』にも自筆本として載せられているが、文永五年記は経光卿記(『民経記』)の兼仲書写本である。『国書寮典籍解題』続歴史篇によれば、柳原本の『大普会部類』に正安三年の勘仲記逸文が含まれているというが、未見。
- (5) ほかに、わずかな自筆本断簡が下郷共済会所蔵の「広橋文書」の中に伝わる。
- (6) 永仁二年曆記の場合、裏書はないが、切継紙がある。ただし、その切継紙に書かれた記述は同じ年月日の『兼仲卿記』と同文である。この年については『兼仲卿記』と『兼仲卿曆記』との関係、性格の違いをあらためて考えなくてはならないだろう。
- (7) 『国史叢説』吉川弘文館、一九二五年。初出は一九一八年。
- (8) 『中世国家と神国思想』(『日本中世の国家と宗教』岩波書店、一九七五年)。初出は一九五九年。
- (9) 本郷和人『中世朝廷訴訟の研究』東京大学出版会、一九九五年。初出は一九九〇年。
- (10) 一般に兼平が摂関の地位に就いたことで近衛から鷹司家が分立したといわれているが、これには疑問がある。兼平は近衛殿に居住し(二月三日条、子息基忠は「近衛前殿」と呼ばれている(六月二日条)。また、兼平が位子の入宮の沙汰を行っているなど、基平亡き後、その遺児たちは近衛流の家長兼平のもと

に包摂されていた。今後、家政・家産のあり方を含めて考察する必要があるが、文永一年の段階の近衛流は兼平を家長（「大殿」）とするひとつの「家」を形成しており、近衛家・鷹司家に二分されていないと筆者は考えている。したがって、ここでは「近衛流摂関家」と称しておく。

(11) 高取正男「神道の成立」平凡社、一九七九年。初出は一九七六年。

(12) 勝田至「中世民衆の葬制と死穢」『史料』七〇―三、一九八七年。

(13) 『吉統記』文永一〇年（一二七三）六月九日条ほか。

(14) 『山槐記』文治元年（一一八五）九月一日条。

(15) 『薩戒記』応永三三年（一四二六）七月一日条。

(16) 『山槐記』治承四年（一一八〇）七月一日条。

(17) その後、兼頼が文庫の管理者となると、兼仲は兼頼から記録を借りている（弘安元年閏一〇月二八日条。弘安三年（一二八〇）の兄兼頼の早世によって「家」

継承者となった兼仲は、三年後の弘安六年六月一九日、家文書を管領すべき院

宣・殿下御教書を得ると、文庫の管理者として虫払いや掃除に従事している。

(18) 「家」継承と家記との関係については、拙著『日本中世の家と親族』（吉川弘文

館、一九九六年）を参照されたい。

(19) 『尊卑分脈』。

(20) 本館所蔵「田中穰氏旧蔵典籍古文書」には宮内庁書陵部所蔵柳原本『武家年代記』

の転写元と見られる室町時代中期の写本『公武年代記』が含まれているが、これも七月三〇日としている。

## 翻刻凡例

一、漢字は原則として常用漢字を使用した。

一、日付・干支および巻末の曆家署名以外の曆部分、年中行事を書き入れた頭書は省略した。

一、組み版の都合上、改行は「」で示して追い込んだが、記主の意図的な改行と見られる場合には原本通りの改行を行った。

一、紙替わりは「」で示し、紙数を注記した。

一、校訂に関する傍注は（一）、人名・地名などに関する傍注は（一）を用いた。

一、行間補書のうち、本文に挿入すべきものは右傍に傍点を付して本文中に入れた。

一、原本が記号を用いて行単位の挿入を指示している箇所は指示に従って移し、その旨を注記した。また、錯簡箇所も正して、同じくその旨を注記した。

一、虫損未判読文字は□で示した。

一、塗抹文字は■を用い、判読できる場合には×を冠して傍らに注記した。

一、割り注内の細注は組み版の都合上へへに入れて示した。

一、なお、別に巻首・巻尾・同裏奥書、および切継紙紙背文書の写真を掲げた。

翻刻に際しては、学習院大学の新田英治先生、本館歴史研究部の益田宗氏より多くの教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

(第一紙)  
文永十一年具注曆日 甲戌歲

正月小

一日己卯、天晴、風静、万春之始、吉慶重疊、幸甚々々、元日節会、  
(藤原師忠) 内弁右大臣殿、外弁花山院大納言、(藤原長雅) 院拜礼、(藤原始子) 大宮院拜礼、(藤原兼平) 殿拜礼、小  
朝拜可尋記、入夜左司郎御参内、(藤原兼賴)

二日庚辰、晴、風烈、御讓位事有其沙汰、来十一日・廿六日由、内々  
(後醍醐) 在清朝臣注申云々、正月佳例、(又後鳥羽) 土御門・法皇二代之例云々、此事

自旧年有沙汰歟云々、  
(第二紙) 三日辛巳、晴、室町・神仙門両院吉書、左司郎被覽申、  
(藤原内親王)

入夜、見齒固、幸甚々々、  
(又入夜見齒固) 四日壬午、晴、(藤原) 浴蘭湯、盛家入道持参一献、催来樂之、  
(龜山天皇) 興幸甚々々、

五日癸未、晴、叙位議、頭弁頼親朝臣奉行、執筆右大臣殿、  
(藤原) 賦一篇、依吉曜也、

六日甲申、晴、及晚雨降、御讓位廿六日必定之由被仰下云々、  
(藤原) 七日乙酉、雨休、白馬節会、経頼奉行、加叙宣下、

衣笠中納言有事依抱瘡煩也、  
(藤原経平)

八日丙戌、晴、女叙位、雅憲奉行、  
(源)

九日丁亥、晴、余寒入骨、時々雪紛々、大宮院御幸始、御入内、密儀、  
八葉御車、公卿・殿上人直衣・衣冠相交步行在御車後云々、

十日戊子、晴、室町・神仙門院御祈始也予奉行、河臨御杖使藏人行繁勤  
之、陰陽師在清朝臣、仁王講僧二口道玄僧正沙汰進之、御布施已下庁  
所致沙汰也、

十一日己丑、晴、  
(第三紙) 十二日庚寅、雨降、戸部御参円満院并前殿、及晚向河東歡喜光院、浴蘭湯、  
(藤原経光) 伴来弁殿、(内助法親王) 聖護院宮二間御初参、(藤原基忠) 右大将殿加階正二位御慶申、家司定藤  
奉行、(覺助法親王)

十三日辛卯、雨降、  
(藤原基忠) 十四日壬辰、晴、御齋会竟、内論議、僧事宣下今日延引云々、  
(藤原兼基)

十五日癸巳、晴、未廻以後雨降、中納言中将殿御慶申、左司郎御奉行、  
(藤原兼基) 外記政始、

十六日甲午、雨降、踏歌節会、  
(藤原兼基) 十七日乙未、朝間雨降、及晚迎晴、法皇御月忌也、小除目・僧事等宣下、  
(藤原兼基)

射礼上卿、  
(龜山天皇) 十八日丙申、晴、院惠法印入来、禁裏御馬御覽、左大臣・前右府・内府  
(藤原家経) 已下、(藤原通雅) 濟々焉祇候、御隨身等乘之、  
(藤原師)

十九日丁酉、晴、  
(藤原) 廿日戊戌、陰、時々雪飛、余寒太、三条坊門殿立四足門、四条前中納  
(藤原隆行) 言沙汰也、来廿六日、御讓位料云々、大宮院御幸常葉并第、可為御所  
(藤原) 云々、

廿一日己亥、陰、余寒入骨、少將師藤朝臣内府禁色宣下、上卿新大納言、  
(藤原伊賴) 右大将殿御加階後御着陣家司定藤奉行、

廿二日庚子、陰、余寒太、

廿三日辛丑、晴、結構小弓、

廿四日壬寅、雨雪時々霏々、入夜結構小弓負態事、盃酌數巡、幸甚々々、

廿五日癸卯、晴、行幸三条坊門殿、明日可被行御讓位節會之故也、行

幸事、(藤原經末)頭內藏頭奉行、

廿六日甲辰、晴、御讓位在別、

廿七日乙巳、晴、

廿八日丙午、晴、

廿九日丁未、晴、春日祭近衛使右中將教經朝臣參內、上皇御湯始云々、

年預降康、朝臣調進雜具云々、

二月大

一日戊申、晴、參春日社、(藤原兼賴)尚書令下向祭給、(藤原經光)戸部・母儀・典侍殿同御

參、酉斜下着、南都、先謁東光院僧正、所勞危急之間、為相訪也、次歸

宿所神主泰通社頭館、

(裏書)

一日下、

補飢之後、宮廻奉幣、深更被行禮奠儀、近衛使右中將教經朝臣、

弁左司郎、内侍、外記、史、無内藏寮并馬寮、使等、代始

可有興行之儀處、不被催進、奉行職事雅憲未練之故、歟、便宜々々、

二日己酉、晴、早旦宮廻、次還向、今日大北政所御參詣、於途中參會、

所立入便宜所也、殿上人・諸大夫濟々為供奉、内裏初度七瀬御被、政始、

太上天皇尊号宣下、御隨身同宣下、

三日庚戌、晴、自夜雨降、終夜不休、

四日辛亥、晴、及晚風烈、開闔解陣、

祈年祭、上卿善勝寺大納言、并右少棟望奉行、

五日壬子、晴、

六日癸丑、晴、園韓神祭、上卿新大納言、并經長朝臣、外記有保、史

重能等參行、

七日甲寅、晴、上皇御脫履之後、初度御幸、院司經長朝臣奉行、見物、

八日乙卯、晴、參近衛殿、右大將殿御方大原野祭御奉幣御被陪膳所參

勤也、役送、基業、幣取宗成、陰陽師泰盛朝臣、於庭中御拜兩段再拜、

次中納言中將殿

(裏書)

八日下、

同御奉幣、陪膳予、役送賴泰、幣取雅綱、陰陽師維弘朝臣、入兩

御方見參退出、次參円満院宮、戸部同御參、令人見參給、

小楊津御厨季通濫行事、条々被申之、可有御沙汰之由有御定、藏

人次官經賴參會、昨日御幸間事所談也、仙洞北斗法事、宮可有勤

仕之由被申、為御使令參仕云々、小時退出歸家、

上皇御馬御覽、

大原野祭上卿新宰相中將実冬朝臣、并定藤、外記利重、史政

俊等參行云々、

九日丙辰、晴、彼岸、精進、転読法華經、



十日丁巳、晴、積奠、上卿堀川大納言（藤原基経）不覺詩、以次新大納言、參議（藤原實家）左大弁、（藤原実冬）新宰相中將、弁、經長朝臣、少納言在綱、儒卿在宗・茂範卿撰宴席云々、  
十一日戊午、朝間雨降、時々止、參前殿下北政所御方、今日有御着帶（第六紙）事（第七紙）、御帶使所令勤仕也、束帶、召具雜色兩三輩、小時被出御帶納御弘蓋以打裏裏之、彼御方南面自蔀間被出之、

（裏書）

十一日下、

予參迎給之、於中門給小使下家司為茂着布衣令納長櫃仕丁・釜殿等昇之、  
舍人等相副、於南門外乘車、小使下家司・長櫃等前行車前、參河西実相院僧正御房、内々下家司申上事由、次申次僧共於堂取御粥、（第六紙）益令授僧、持參御前方、御加持、法問、予坐中門廊、小時被返下如元納之、帰參御所■進入、季康朝臣持參、仙沼子、進入次次、奉行職事時方被問吉時（前略）・吉方（東等）、殿御方入御彼御方、被奉結之歟、次有御禊、於南向御堂内庭上立八足、敷陰陽師座、維弘朝臣、着座束帶、時方持參御贖物、予取之進簾中、御禊了陰陽師顧面予方、降地上徒跪、於陰陽傍跪居、以大麻進入簾中、御禊了被返下御贖物、  
・大麻等、予給之、待益送時方之後、予退去、次御驗者嚴助僧都參始護身、小時退出、次被行御祈始、河臨御穽使侍家康勤之、每事幸甚々々、於殿御方、条々有御雜談、數剋祇候、秉燭之程入御、參近衛殿、次基業入見參、小時、帰家、抑北政所依御親父入道左大臣事、日来御服假、而今日始被召吉御装束等、不及、御除服云々、今度不及家司之奉行、且先例云々、

十二日己未、陰、雨降、今日仙洞初度評定、頭弁奉行、撰政殿已下參仕、神宮領鎌田（遠江国）御厨事有沙汰云々、院北面始云々、上北面以良・成經等朝臣、

十三日庚申、晴、賦一篇、守玄訓、

十四日辛酉、晴、

十五日壬戌、晴、

十六日癸亥、晴、被始行県召除目、直廬儀、頭弁奉行、執筆左大弁、

被付行坊官、除目、

十七日甲子、晴、除目中夜、

十八日乙丑、晴、除目入眼、今明兩日依日次不快延引、可為廿日云々、

後鳥羽院御八講始、右少弁棟望奉行、（平）

十九日丙寅、晴、仙洞名謁始、

廿日丁卯、晴、上皇第二度御幸（第七紙）幸北白川殿、

除目入眼（即被下々名）、

廿一日戊辰、晴、及晚景雨降、宗長今日他界、日来流布之所勞云々、

朝夕隨分召仕之奴也、眼前無常無物取喻、

廿二日己巳、雨休迎晴、

廿三日庚午、晴、上皇尊号詔書覆奏、上卿善勝寺大納言參陣、少納言（源）顯

綱有請印政云々、

廿四日辛未、晴、上皇第三度御幸（密儀）院尊号御報書儀院司右少弁棟望奉行、

開闕使參内、

廿五日壬申、雨降、

廿六日癸酉、陰、雨時々降、上皇御幸龜山殿、暫可為御所、

自今日奉為法皇被修御八講、大宮院御沙汰云々、奉行院司左中弁親朝朝

臣奉行、

廿七日甲戌、晴、御八講第二日、

廿八日乙亥、晴、

廿九日丙子、晴陰不定、母儀御參籠北斗降臨院、

御八講第四日、

卅日丁丑、雨降、終日不休、御八講結願也、

三月小

一日戊寅、晴陰不定、時々雨灑、

二日己卯、晴陰不定、院御鞠御会、後聞、座主前大僧正澄覺被下親王

宣旨、孫王立親王宣下事、曾無例云々、円満院宮被宣下二品云々、上

卿新大納言、左大弁參陣、

三日庚辰、晴、院蹴鞠御会、前藤大納言已下応清撰云々、

四日辛巳、晴、院尊勝陀羅尼供養、於龜山殿被行之、院司經業朝臣奉行、

五日壬午、朝間晴、未剋以後陰、雨降、上皇自龜山殿還幸、即幸常盤

井殿、御即位日時定、行事所始由奉幣、大栂・高御座修造等日時被勘之、

上卿内大臣、

(裏書)

參議左大弁、弁左中親朝朝臣、職事忠世奉行、

六日癸未、晴、

七日甲申、晴、

八日乙酉、陰、濕雨、礼服御覽、左司郎令向內藏寮給、弁左中・左少向

礼服藏、參仕、直廬公卿土御門・花山院・大炊御門大納言等、吉田中

納言、職事忠世・雅憲等祇候、

九日丙戌、雨降、自今日被始行長講堂御八講、右少弁棟望奉行、於正

親町長講堂被行之、本御堂炎上之後、被移此御堂、公卿可尋記、

十日丁亥、晴、

十一日戊子、晴、藏人所滝口大寄、職事雅憲奉行、新三位茂範卿・治

部卿兼文章博士在匡朝臣等被仰侍読、頭弁奉行、

十二日己丑、晴、

十三日庚寅、晴、長講堂御八講結願、公卿西園寺大納言・吉田中納

言・堀川前中納言・別當・中納言中將殿・平宰相、左大弁・大炊御門

三位中將、堂童子定光、在兼、本院有御幸云々、

十四日辛卯、晴、御即位由奉幣、撰政殿御參神祇官、被發遣、職事忠

世奉行、上卿西園寺大納言、弁右少棟望、

十五日壬辰、晴、祇園一切經会、院司左少弁殿御參行、

十六日癸巳、晴、

十七日甲午、雨降、北野仁王講結願、有作文、左少御參、

依円満院二品親王事、仁和寺親王含愁御籠居之由有其聞、

十八日乙未、雨降、

十九日丙申、晴、

廿日丁酉、晴、御即位叙位、執筆左大弁、向吉田宿所取出貞応大嘗会

文書、經長朝臣<sup>(藤原)</sup>所借申也、文書内撰定、帰路謁幸全律師、小盃酌、小時帰華、

(裏書)

廿日下、

太上天皇尊号御報書勅答、經頼奉行、上卿堀川大納言也、大内記  
遅参之間及<sup>(源基基)</sup>、数剋、堀川重相為勅使参院云々、叙位公卿<sup>(マ)</sup>、

廿一日戊戌、<sup>(文雨降)</sup> ■ ■

廿二日己亥、晴、小除目、職事忠世奉行、上卿新大納言、清書実冬朝臣、<sup>(藤原)</sup>  
御即位関東功人等被任之、宮二品位記請印、上卿新大納言、

廿三日庚子、入夜雨降、

廿四日辛丑、天曙後雨休、

廿五日壬寅、晴、近衛殿姫君女御参事、一定有御沙汰、<sup>(藤原位子)</sup> 本家職事行長<sup>(源)</sup>  
可奉行云々、

廿六日癸卯、雨降、已剋以後属晴、午斜風雨相交、無程又晴、御即位、

廿七日甲辰、晴、或者云、去夜半日吉八王子・三宮神輿於山上破却、<sup>(第一紙)</sup>  
■ ■ 衆徒可奉動之由結構、而座主宮御門徒<sup>(青蓮院)</sup> 梨本方加制止、仍破却云々、

依二品親王事也、座主宮又令証朝

(裏書)

廿七日、

恩給之間、於彼御門人<sup>(梨下方)</sup> 随貫首之命、抑留神輿令制止云々、  
来月祭礼頗不定云々、青蓮院衆徒陸梁云々、

廿八日乙巳、晴、

廿九日丙午、晴、

四月小

一日丁未、晴、告朔之朝幸甚々々、平座、<sup>(平)</sup> 忠世奉行、上卿新大納言、<sup>(藤原伊頼)</sup>  
参議左大弁、<sup>(藤原資忠)</sup> 弁<sup>(右中)</sup> 少納言守通参仕云々、<sup>(藤原経長)</sup>

二日戊申、晴、松尾祭、<sup>(平棟望)</sup> 左少弁殿令参行給、予密伴参、社橋之景氣断  
腸者也、及晚帰家、内侍<sup>(藤原兼頼)</sup> 少将<sup>(マ)</sup>、史<sup>(マ)</sup>、

平野祭、上卿源大納言通基、弁右少棟望、宣命上卿新大納言、殿上使信  
輔参勤云々、

三日己酉、晴、<sup>(藤原兼平)</sup> 大殿御拝領丹波国、甲斐・石見両国御辞退、丹州元園  
城寺知行、而<sup>(源)</sup> 大嘗会主基北舍相当間、寺家之沙汰不可叶云々、大殿可  
有御沙汰云々、淡路<sup>(元師親卿)</sup> 被付三井、<sup>(知行)</sup>

(裏書)

三日、

石見師親卿拝領之、甲斐為院御分国、大理經任卿國務云々、<sup>(藤原)</sup> 彼師  
親卿<sup>(同)</sup> 月下句遇父喪籠居之程也、相承知行之国還相逢之条、尤不便  
歟、今夜二条相公羽林被入来、随分簪公所奉賞翫也、予対面、<sup>(藤原経良)</sup> 勸

申盃飯、每事幸甚々々、曉更被帰畢、自去年比有此儀云々、

四日庚戌、晴、新大納言伊頼、昨日上辞状、自草、前少納言資兼所清  
書也、<sup>(藤原)</sup>

五日辛亥、陰、被行祭除目、職事忠世奉行、弁殿転右中弁、令叙四品給、  
御自愛無<sup>(マ)</sup> 他者也、上卿、

六日壬子、雨降、弁殿参院、被賀申転任事、

七日癸丑、晴、戸部卿有御羨事、御温氣相交、

八日甲寅、晴陰不定、依代始無灌仏、大宮院御方許被行之、院司範長朝臣、奉行、家君御違例、今日無殊事歟、可悦、

九日乙卯、晴、藏人右佐高朝申慶從事、入夜相公羽林被入来、勸申一献、

家君御違例又令発給、御平臥、

十日丙辰、晴、仙洞初度御作文、絶句、仙家契万年、題中、大理奉行、右中

弁殿令申拝賀給、大嘗会悠紀御奉行事、藏人右佐高朝奉書到来、被申

領状了、

十一日丁巳、雨降、任憲法印自昨日始行本命元辰供、御違例同体也、

十二日戊午、晴、御違例増氣之体也、大小便不通、御身殊令苦給、予

雖何時、不奉放目、所奉看病也、

十三日己未、晴、御違例同体也、大便不通之間御氣又寛発、旁非無御

怖畏、可哀者也、

十四日庚申、晴、御違例逐日御増氣、在清朝臣今夕行泰山府君祭、

祇園社僧出来、令唱法号・陀羅尼、依有御温氣也、

十五日辛酉、晴、家君御違例已危急也、今日御出家、頼譽法印為御戒師、

御法名道寂、右中・予等相計之、大略無憑体也、可哀々々、亥剋許薨去、

臨終正念、唱念仏、

(裏書)

十五日下午、

如眠令遷化給、眼前之無常、心中之哀傷、無物于取喻、

及晚馳参室町院并前殿、申入遂素懷之由、室町院年預三十余、年御

奉行也、右中并無相□可被補、知行之御領等同不可有相違、由、

以女房所申入也、兩条共不可有相違、蒙慰勸御定退出、次参、前殿

下、申入子細、兩御方殊驚思食、殿中之元老也、御悲歎無他趣也、

馳帰之後、申聞仰詞等、今日弥陀縁日也、本攬有憑、臨終、正念

令終給、今年六十三旧齡也、

十六日壬戌、晴、今夜有御葬礼事、御入棺已下一向聖人沙汰也、蓬屋

別廓内構、御墳墓東壇上也、相催紅涙之外無他、事畢帰勘解由小路、自今

夕被始不断念仏并例時、

(裏書)

十六日下午、

秉燭密奉遷吉田蓬屋、以此所為葬家、御没後事等可有沙汰也、

祖母禅尼今日令渡坐給、今日前大納言伊頼訪来、勘解由小路三位、

此外、頼源法印等始親疎随触耳人々訪来、弥催哀之涙、心中悶然、

十七日癸亥、陰、自今日止住吉田葬家、朝懺法、舍利講、例時、阿弥

陀護摩、僧三口為御籠僧勤修之、不断念仏、予戊時所勤仕也、

以舍利講、日仏供養可通、用也、禅尼每事所有、御沙汰也、

十八日甲子、雨降、朝夕例時、懺法如常、舍利講、阿弥陀護摩一壇、

予誦誦法華經、又誦懺法、参御墓、僧三口毎日参御墳墓、転誦阿弥陀經

一卷、

十九日乙丑、陰、三品訪来、於門外謁申、例時・懺法・舍利講・護摩

如例、転誦法華經、

(龜山上皇)  
上皇八幡御幸、被用寛元例、無一員舞人等、今日即還幸、

廿日丙寅、晴、懺法・舍利講・例時・護摩如例、

廿一日丁卯、晴、初七日忌辰、祖母禪尼御沙汰也、仏経供養、仏古仏讃嘆、

経法華経一部、具経、駄図面一日書写之、御貴息已下陪仕輩書之、予

第二卷書之、御経遅々之間、入夜

(裏書)

廿一日□、

供養、禪真阿闍梨為導師、説法之体弁舌如誦、催哀傷之外無他、

母儀・右中・内侍・予等修誦経、諷誦文例状也、復任以前之間、

不書官、只位許書之、且先例也、御導師■布施小袖一領、余僧

二口、

隙駒如馳、如夢如幻、可哀者也、今日參御墳墓、籠僧浴蘭湯、給

僧前等、

今日八幡臨時祭也、以内蔵頭経業奉行、使三位中将実重卿、(兼原)舞人

可尋記、庭座公卿(マ)、

廿二日戊辰、晴、懺法・舍利講・例時・護摩如例、後聞、上皇御幸富

小路殿本院(後深草上皇)御所、終日有蹴鞠御会等、御贈物御劔一腰、御琵琶一面被

儲供御、別當為雑掌調進云々、

廿三日己巳、陰、懺法・舍利講・例時如例、講布施小御器三、護摩同

行之、終日転読法華経、又書写阿弥陀経、御中陰間四十八卷奉書之所

願也、

廿四日庚午、雨降、朝間懺法、予同読之、毎日如此、舍利講、布施念

珠糸、例時・護摩等如例、書写阿弥陀経、転読法華経、談義往生要集、

廿五日辛未、陰、懺法・舍利講・例時・護摩如例、談義往生要集、書

写阿弥陀、転読法華経、

今日上皇御幸賀茂社、院司経業朝臣奉行、伝聞、公卿善勝寺大納言已下

供奉云々、

廿六日壬申、晴、懺法・舍利講・例時・護摩如例、書写阿弥陀経、

談義往生要集、

廿七日癸酉、晴、懺法・舍利講・例時・護摩等如例、明日、一日経率

都婆所分附書写人々也、

廿八日甲戌、晴、懺法已下如例、今日二七日忌辰也、姉妹禪尼妙恵所

有其沙汰也、仏古仏讃嘆之、法華経一部普賢・無量・心経、率都婆面一日書写之、

予第二卷書之、自寅刻書之、

(裏書)

廿八日下、

入夜供養之、此外随求陀羅尼・尊勝陀羅尼・宝篋印陀羅尼・光明

真言・阿弥陀大咒・宝楼閣、手自駄図面書之、被副供養、甚深之

至福也、導師禪真勤之、母儀今日令落華髮給、草刈上人為御戒師、

如法密儀云々、御法・名・性・真・予修誦経、諷誦文如例、光陰如馳、

更催哀傷之外無他、籠僧等浴蘭湯者也、

今日上皇御幸禪林寺殿、田栽所有御覽也、範蒼法印儲供御云々、

又有御鞠御会云々、

大嘗会国郡卜定、

廿九日乙亥、晴陰不定、懺法・舍利講・例時・護摩如例、書写阿弥陀經、  
日々談義法文之外無他營、神祭停止之、

五月小

一日丙子、晴、

二日丁丑、

三日戊寅、雨降、午刻有小恙、溫氣相交、流布之所勞無疑者也、

四日己卯、雨降、修善等如例、予終日写經、

五日庚辰、(第一五卷)雨降、風烈、未斜属晴、修善等如例、予終日写經、

六日辛巳、晴、今夕戌剋退出神樂岡草庵、依所勞也、

今日三七日也、御仏事内侍殿如形所被沙汰也、率都婆法華經一部具經、

一日書写之、

(裏書)

六日下、

仏古仏讚嘆、導師壇紙十帖、(標)題名僧二口五明少々、志之至如形被奉報者也、

七日壬午、

八日癸未、

九日甲申、

十日乙酉、

十一日丙戌、

十二日丁亥、今日石塔婆一基所供養也、梵字禪真阿闍梨書之、布施先人

御草子箱、(供養導師真動之、)即立御墳墓、次供香花、次阿弥陀經、光明真言、念仏、

十三日戊子、四七日也、予經營御仏事、病中雖無他事、爭又可置止哉、  
仍志之至、奉報謝之、古仏讚嘆、率都婆法華經一部・普賢・無量・心  
經・阿弥陀經等

(裏書)

十三日、

一日書写之、予依所勞經廻他所之間、不及書写、此外四十八卷阿弥  
陀經、所勞以前十余卷書之、其殘相詛人々、又宝篋印陀羅尼一

反、光明真言四十反、率都婆面書之、予息災之時書置之、所勞以

前每事所沙汰置也、御導師分鳥目十連、題名僧二口各三連歟、僧

溫室・僧前等如形各下行用途了、

十四日己丑、

(第一六卷)十五日庚寅、

十六日辛卯、

十七日壬辰、

十八日癸巳、

十九日甲午、

廿日乙未、五七日御仏事、姉禪尼御沙汰、一日經如例、御導師已下御

布施、可尋記、

廿一日丙申、

廿二日丁酉、

廿三日戊戌、(龜山上座)後日在益相語云、今夜深更上皇御乘船有觀覽大井川、洞

院中納言、(藤原)公守・中將実盛朝臣兩人祇候御共、河上眺望叡感之余、曉月

景氣

(裏書)

廿三日下、

可被御覽之由人申之、仍河上マテ差上御船、嵐山麓ヨリ、白雲立昇、件雲ノ間ヨリ法師ノ臂張タル見之、叡慮已下、御共人奇之、件迦如法有薰香、人々弥奇之、能々令見之処、非、法師、河上立タル木也、令取之、洞院・実盛朝臣兩人以奴袴結搦之、件木於河縁自岸兩人引之、令引付棧敷殿前、地藏菩薩之、聖化歟、匪直也事也、以件木、於棧敷殿御所内、上皇并洞院・実盛等、翌朝廿四日依縁日令作成地藏尊容給、猶難被成立之間、近辺仏師被相尋之、処、尺迦堂辺老仏師名字可尋參入、令終功、殊勝之体也、件仏師被叙法橋、又被仰尺迦堂大仏師、廿五日(依縁日)密有御供養之儀、上皇自令読講式御時々黄門琵琶、実盛筆策、有糸管之興、被供養之、如法密儀、荒涼人不參、其間不聞食奏事、無他事、手自所有御沙汰也、被奉安置棧敷殿、金作錫杖御所二自元有之、件錫杖被用云々、叡感之余、廿六日憲実法印為御導師奉供養之、根元之子細振并舌、言泉涌而詞華鮮、隨喜之涙難抑者也云々、件木仏師并番匠不見知之、若梅檀木歟、薰香太者也、緯之不異世、雖及焼香、無止者也、地藏之變化無疑者歟、為珍事之間、注付之、

廿四日己亥、

(第七紙)

廿五日庚子、晴、所勞之後始洗濯手足、吉時午剋所向北方也、幸甚々々、

廿六日辛丑、陰、始梳鬚髮、

廿七日壬寅、雨降、已剋以後属晴、依吉日浴蘭湯、吉時午剋、所向北方也、

戌剋去病席移吉田草庵、今日六七日云々、祖母禪尼御沙汰云々、御導師

(裏書)

布施白帷三、

廿八日癸卯、晴、

廿九日甲辰、晴、暑氣漸如蒸、前大納言伊頼被音信、戸部省一事、被不審仰、

六月大

一日乙巳、陰、告朔之朝、万事幸甚々々、今日被行小除目、前大納言任民部卿、

二日丙午、陰、

三日丁未、晴、

四日戊申、晴、寅剋勘解由小路蓬屋焼失、放火之故云々、文庫免余煙、文車大略取出之、予抄物已下、愚記・細々書籍不残一紙化灰燼、去今兩月物忽無比類者也、

(裏書)

四日下、

(藤原経光)

先人御事悲歎無他事之処、如此珍事出来、微運之令然歟、可慎々々、自大殿御所以女房奉書被訪仰下、畏申了、件屋祖父之御時被建

之、造宮之後未逢火災之難也、嚴親令去給之後、忽此災起、」歎中之歎、心中惘然之外無他、可哀者也、曾祖父(藤原兼光)姉小路殿・祖父納言殿二代御記」半分余燒失、口惜事也、姉小路殿書写本也、祖父御自筆也、可哀々々、」

六月会勅使權右少弁雅憲參行云々、右少弁(藤原)定藤未役之仁、称不諧去、今二年不參行、為公事不便々々、」

五日己酉、」晴、午刻着凶服向北方、中陰之間可着<sub>密略之</sub>用之處、依所勞無沙汰、不可默止之間、帶許」用之、省略儀也、布黑染布衣、中陰以後雖可着<sub>密略之</sub>用、無其詮之間、<sub>(裏書)</sub>帶着用之後、」

五日下午、」

所用白直帶也、省略之条雖不可然、無其用之間略之、中陰中、故為着用事間、」依吉日、今日所用也、今日四十九日也、御仏事(藤原兼光)右中弁殿御沙汰也、一日經」如例、古仏讚嘆又同前、御導師布施三結・被物一重、」余僧一結云々、予修諷誦、今夜分散、母儀并典侍殿」

予宿歎喜光院內侍殿宿所、曉更歸本宿所、」

六日庚戌、」晴、炎暑如蒸、今夕行幸仙洞、明日神輿路令去給料也、後聞聊依」御不予行幸停止、少將并神輿路次、止東洞院上、可為他路之由被仰下了云々、」

七日辛亥、」雨降、」

八日壬子、」晴陰不定、或晴或雨降、」

九日癸丑、」晴、」

十日甲寅、」晴、入夜向粟田口親時宿所一宿、左中弁(藤原為經室・藤原定高女)經長朝臣母儀令頓死了、大札悠紀事、」日来為奉行弁、而籠居之条珍事也、今度大札行事弁承奉行之後二人籠居」

十日下午、」

先規頗遲返歟、大札年二人禁忌事、以外有其沙汰云々、」右中弁殿・經長朝臣兩人云々、代始服假弁建曆元年(藤原)左右中弁定高朝臣、

今日御月忌始、依吉日也、舍利講一座被行之、布施紙一束」給之、又祖母禪尼尺迦仏供養、年來之所願也、去四月十九日」相嚴親御遠忌、可供養之由有其支度之處、故殿御事俄出來之間、」每事無便宜而延引了、仍今日所被遂也、導師自覺上人弟子、」名字可尋、振弁

舌云々、件仏院惠法印作之、奉模嵯峨尺迦、十弟子」同坐之、眉間奉藏仏舍利、御身被奉藏尺迦大願一切經目錄已下、」<sub>(種々)</sub>言等、委可尋記、予不及聽聞、所勞日數被相憚之故也、」

十一日乙卯、」晴、親時種々儲盃飯、所賞翫也、入夜歸華、」

十二日丙辰、」晴、及晚夕立、」

十三日丁巳、」晴、未刻以後夕立、」

十四日戊午、」晴、祇園御靈会、内御方馬長頭中將奉行、」

大嘗会主基右少弁定藤可奉行云々、悠紀事未定歟、」

十五日己未、」晴、暑氣如蒸、御月忌、舍利講一座、禪真阿闍梨読式、

布施厚紙十帖、」予參墳墓、所勞之後始所參也、念仏五万遍、阿弥陀經六卷転読之、」



十六日庚申、晴、曉更移勘解由小路富小路宿所、女房大宮局宿所借用之、  
母儀奉伴之、(龜山上皇)上皇弘曉御幸、龜山殿、在益隨身一獻入來、經茂為御使  
入來、被仰合(加賀國)富積間事、

十七日辛酉、晴、向親時第、隨分可為聲公之故也、盃酌數獻、終頭有  
贈物、銀劔一腰、件劔關東經廻、(北条時宗)時、相模守所志給宝物由称之、又桑  
絲濟々志与之、青侍并僮僕等各給□桑一具、

(裏書)

十七日下、逐晚景歸畢、每事幸甚々々、所祝着也、心□無極者也、今  
夕相公羽林被、(藤原経良)入來、小時令帰畢、

今日大嘗会由山陵使發遣儀也、職事藏人次官(藤原経頼)奉行、上卿土御  
門大納言定実卿行事、(源)

十八日壬戌、晴、炎暑過法了、入夜相公羽林被入來、所面謁也、

十九日癸亥、晴、仙洞御作文、懸物百種被置之、勒字(六韻)後聞、延引  
云々、

東使上洛之由風聞、高橋七郎上洛云々、女御入宮可為廿八日云々、

廿日甲子、晴、以左大臣可為撰政之由被下詔、上卿左衛門督殿、職事  
宣下、(藤原家経)

廿一日乙丑、晴、新撰政殿御慶申可為廿七日云々、前撰政殿去夜間密  
令帰九条給云々、(藤原忠家)

大嘗会故実無御存知之間、俄被仰合、関東及改易之沙汰由有閭巷説云々、

(裏書)

廿一日下、

左相府去年近衛前殿御改易之時、尤可被開榮運、且又去正月、龍  
興之時天、為東宮傳不可有子細之处、此兩度空令馳過給之間、氏  
大明神之冥慮歟、若又御微運之至歟之由存之处、無相違令蒙詔給之  
条、尤珍重事也、前殿又為太閤定有御出仕歟、執事藏人右佐高朝  
当其仁云々、前撰政御時、氏院・氏寺兩參賀、文、殿始、此三个事  
外執柄始次第事等不被行之、不被上三度御表之以前、改易条、頗無  
先規歟、

廿二日丙寅、晴、入夜向御所女房金吾局宿所、条々所談也、其次謁業行、  
殿中不審且所散也、

廿三日丁卯、晴、(第二〇紙)

廿四日戊辰、晴、(第二一紙)

廿五日己巳、晴、上皇御幸西郊、御方違云々、

廿六日庚午、晴、入夜二条相公羽林被入來、被談云、新撰政殿左大臣  
并左大將暫不可被辞申云々、明日拜賀御隨身可為上薦人云々、有先  
例云々、(藤原道長)御堂関白殿御例云々、(第二二紙、別紙)

廿七日辛未、晴、今夕新撰政殿下御慶申也、大臣大將猶令兼帶給、御  
隨、身官人番長二人可被召具云々、是則御堂関白殿御例云々、秉燭之後、  
先御院參、上皇於中御門町辺有觀覽云々、予、密所伺見也、路頭行烈、  
今夜雜色面々不着下袴、(第二三紙)

先前駟笠持二行、次居飼四人(兼松明)、  
次御厩舍人四人、次府一員二人(交名可尋)、  
次殿上前駟為先下薦、

次御厩舍人四人、

次殿上前駟為先下薦、

藏人頭右中将公貫朝臣、

左中将(藤原)為世朝臣、

左京大夫隆博朝臣、

左少將(藤原)宗冬朝臣、

左少弁棟望、

右少弁定藤、

藏人左衛門權佐忠世、

藏人勘解由次官經賴、

藏人右衛門權佐高朝、

權右少弁雅憲、

民部少輔雅藤、

木工頭(藤原)為俊、

右少將教頭、

左兵衛權佐重經、

今一兩人不見及、

次地下前駟、

前周防守以繼朝臣、

木工權頭清康已下八人供奉、

次御隨身官人番長一人、

次御車(橋)如例、御車副遣之、牛童持榻、

雜色等如例、

次下臈御隨身六人(列)步烈、

次扈從上達部車、

御舍弟左衛門督実家卿(藤原)前駟二人、隨身四人、

別當經任卿(藤原)後駟官人召具、行粧如例、

平宰相成俊卿、

大炊御門宰相中将冬輔卿、

右宰相中将実冬卿、

還御里第之後、次第事等被行云々、被補家司等、

執事高朝、

年預忠世、

氏院弁定藤、

華殿(上為俊、下則任)、

鹿田高朝、

方上(藤原位上)可拝領云々、

廿八日壬申、

天晴、風和、今日近衛故關白殿姫君、御歳十三參入上皇宮、

今度被用高陽院長承例、

院女御例、頗難、難近、向三度有之、件年々可勘知、抑此御吉事、去

七郎上洛之後、必然、其儀、

本家職事行長奉行、不及家司之口入、仙洞儲御

所事、忠世所奉行也、於近衛殿有御出立儀、太閤入御、内々有御沙

汰云々、子剋後令渡路次給、於大炊御門室町辺、予所見物也、尤參御

所雖可見物、服假之身頗其憚多之間、略之、路次室町南行、大炊御門東

行、烏丸南行、至于三条坊門殿、路頭行烈、

先殿上前駟、

民部大輔仲兼(藤原)雜色四人、

右中将頭資朝臣(藤原)童一人、隨身四人、

左中将宗親朝臣(藤原)童一人、隨身四人、

左中将長忠朝臣、

次地下前駟笠持一行前行、

前參川權守師清(藤原)童一人、

刑部權大輔信忠(藤原)童一人、隨身二人、

前内藏權頭仲隆(藤原)雜色二人、

壱岐左近大夫宗成、

前加賀守業基(藤原)雜色三人、

源大夫將監行長(藤原)雜色三人、

次御車半部、御車後女房出彩袖、御車副四人遣之、御牛童持榻、

次雜色長白襪上下紅草、

下毛野武秋、

次出車、

一車 中將長忠朝臣、

二車 中將教俊朝臣、

三車 中將頭資朝臣、

四車 信輔(平)御半物一人乘之、

各前駟武衛二人在共、

次扈從上達部、

右大將殿網代御車、御車副遣之、

前駟三人 宗兼、仲範、行長子、

番長 武冬、近衛六人 布衣上下、

二条宰相中将経良卿(藤原)納代車、車副遣之、

御樋洗雜仕各二人自閑路参会三条坊門殿、被用侍、車、御衣手織被渡之、侍相副云々、每事珍重々々、前源中納言資平卿為御乳父内々又所奉沙汰也、

今度御出立、女房装束已下用途被充催御家領等云々、(藤原頼長)大槪随伝耳、

所記置也、中納言中将殿尤可有御扈從之處、(藤原頼長)宇治左府(長承度敷、下臈中納言中将扈從)例

不快之間、今度不然云々、今度不可有露頭儀、

(第六卷)廿九日癸酉、晴、入夜右中弁殿渡御、左少弁棟望又輕服出来、辞申悠

紀奉行云々、右少定藤(南曹)、権右少雅憲兩人奉行大嘗会云々、近日弁官難得過法者也、

卅日甲戌、晴、今夕六月祓依憚不行之、(眸子内親王)室町院御方事、予不奉行、内

々所有御沙汰也、

自今日被始神泉雨乞、(省原)藏人在頭為勅使、

七月小

一日乙亥、晴、(第七卷)攝政殿御直衣始、殿上人・弁官雅憲乘八葉車連軒云々、

二日丙子、晴、(去夜子)

三日丁丑、晴、(通雅)剋花山院中納言家長卿死去、日者所勞云々、今年廿

二歲、(寛)前右府家嫡、(位)從二位納言也、

四日戊寅、雨降、終日不休、近日炎旱之間、民戸成愁之處、国家之大慶也、

五日己卯、自己剋雨降迎晴、

六日庚辰、晴、住吉社上棟去月廿七日可被遂行之處、国司無沙汰之

間延引、社家与国司相論及訴陳、被差下庁官季重、被尋兩方所存、今日可被行仗議也、上棟事、

(裏書)

六日下、

代々佳例為六月、而今度不慮延引、一向造国司懈怠之至歟、可及罪

科之沙汰云々、

七日辛巳、朝間陰、

八日壬午、晴、祈年穀奉幣(藤原師繼)上卿内大臣、

九日癸未、晴、(實茂)在清朝臣構作泉并風呂、所招引也、仍行向、盃酌數巡、

及夜陰歸畢、

十日甲申、晴、

十一日乙酉、晴、住吉造宮間事、有評定、攝政殿已下人々参、国司

經業朝臣、可被罪科之由人々議奏一同云々、(藤原)

十二日丙戌、晴、藏人頭内藏頭經業朝臣、今日被止見任、住吉社造宮

遲怠之科也、大膳大夫知嗣知行攝州可造宮之由領狀云々、彼朝臣知行

讃岐国一郷去比已被召上了、

(裏書)

十二日下、

經業朝臣為體積患之所至歟、可謂自劫自得果、不便々々、諸庄園

造宮米山口祭前後之間、悉催取之、私用了、又関東任官功数万、正

又日来私用云々、事之様頗有若亡歟、非無公平、身之恥辱、家之

假僅、為子孫尤不便々々、

十三日丁亥、晴、(龜山天皇)上皇御幸常盤井殿、女御殿御同宿之後、初度臨幸、雖為藝、供奉人刷行粧、公卿堀川中納言・花山院三位中將、殿上人隆保朝臣・為世朝臣・実俊朝臣・実嗣朝臣、北面下臈・御隨身等供奉云々、

十四日戊子、東使一人(佐々木)、(文)淡路前司氏信、此間上洛、条々含重事等入華之由有其説云々、昨日參仙洞、

十五日己丑、晴、御月忌如例、転読阿弥陀經六卷、念珠六万反、百日料結縁經、無量義經予分也、今日書写始之、御堂自恣、殿下無御出云々、

十六日庚寅、自夜雨降、終日写經、女御殿侍始、忠世奉行、

十七日辛卯、晴陰不定、弁殿令渡給、聖源僧都入來、勸申一献、

上皇御幸西郊、依御月忌也、撰政殿被上左大将辞狀、今夕兵仗御慶申云々、

十八日壬辰、晴、贈后御八講、右大弁親朝朝臣奉行、

今日写經、転読觀音經、

十九日癸巳、晴、

廿日甲午、晴陰不定、時々雨降、

廿一日乙未、晴、官人職隆入來、明見庄間事所仰合也、

廿二日丙申、雨降、贈后御八講結願、写經、

廿三日丁酉、晴、

廿四日戊戌、晴、參吉田殿、所入祖母并右中丞之見參也、及昏黑歸畢、

今日參墓陵、所拜見也、綠草露深、催悲淚者也、

廿五日己亥、晴、小除目、

廿六日庚子、晴陰不定、時々雨降、百个日御忌也、任嘉禎例被供養結縁經、早旦參吉田、每事所尋沙汰也、御仏事以前參御墓、僧三人伴參、阿弥陀經・光明真言等如例、

(裏書)

廿六日下、

次御經供養、御仏、往日本尊、讚嘆之、導師禪真阿闍梨・題名僧二口(已上、口御前、僧等也)、今日無願文、每事所省略也、右中丞殿令着黒服給、

有御聽聞結縁人数、

第一 民部卿伊頼、(藤原)白麻十帖、

第三 左大弁宰相資宣(藤原)淺黄一卷、第四 祖母禪尼(及紙一帖、銘往生要集上)、

第五 治部卿在通朝臣(音原)檀紙十帖、第六 菅二位良頼卿(音原)檀紙十帖、

第七 妙惠御房(音原)用途一結納之、第八 弁殿御方白布一段、

普賢經(藤原經朝)母儀禪尼御方、吳綿十両、無量義經(藤原經朝)愿分、檀紙十帖、

心・阿弥陀經等(藤原經朝)勘解由小路三位、布一段、

法華經外題予所染筆也、予又有誦經物、諷誦文例狀也、及黄昏之後、帰宿所、於仏前転読阿弥陀經、隙駒如馳、今更催別、涙之外無他者也、去夜小除目聞書披露、

内藏頭藤親朝、

元右大弁也、被召上(升官)、任倉部、件朝臣父祖代々有頭弁之号、

於遺孫被止此号之条、為家為身不便、但無才芸之間、世以不

□之歟、於倉部者、經業朝臣去年十二月八日浴貫首并倉部兩

个朝恩了、依住吉社造當遲怠科、去十二日被止見任等了、件

替親朝朝臣」被任之、於倉部者内裏御服調進之間、急被任之者也、

摂津守橘知顕元藏人廷尉也、 下総守藤頼綱

石見守源師重師親卿拜領之後、始申任国司、

正四位下藤原良基

從五位下橘知顕、 藤昌康

藏人頭

内藏頭藤原親朝

廿七日辛丑、晴、或人云、昨朝入道中務卿親王令薨給、日来御荒痢云々、(宗尊)

法皇御子、御母儀准后殊(平棟子) 御悲歎云々、或説未然令待時給云々、(後醍醐天皇)

廿八日壬寅、晴、自今曉移住他所、日来居住所、宗懷法印上洛之間、

所指合也、本居所以北近衛以南也、

廿九日癸卯、晴、今夕丑剋入道中務卿親王御薨去、令遂往生素懷給、(マ、)

今日被行復任」除目、予即令復任、幸甚所祝着也、

(第三〇紙)  
八月大

一日甲辰、晴、南呂朔日中心多楽幸甚々々、今夕中書王御葬礼、奉渡(宗尊親王)

山科、被用」御車、如平生御行云々、見者流涙云々、

二日乙巳、晴、去廿九日復任除目聞書、良季真人所注送也、復任者十(清原)

一人也、

三日丙午、晴、向普成仏院法印房、浴蘭湯、被勸盃飯、(朝送)

四日丁未、晴、釈奠、宴穩座、依中書大王御事被停止了、

五日戊申、陰、

六日己酉、晴、後堀川院御八講、予奉行、公卿四条前中納言・堀川中(藤原隆行)

納言・右宰相中将、殿上人基顕(藤原実冬)・盛経・基光・保教等朝臣、長俊、藏(藤原)

人行繁・仲経、僧名尊海・俊豪・尊経・房洵

(裏書)

六日下、

実寛・頼源・聖顕・静成・□源・房曉等参馳、今日予不出仕、凶

服者非職事并官之外、冠帯出仕不打任之間、兼日其由申入了、当

日事長俊所口入也、一日院惠法印入来談世上事、花山院大納言雖(藤原長徳)

申領状、依中書王御事、俄不参、凶札参仕之故云々、

今日頭中将公貴朝臣参入、着公卿座末、中将公兼朝臣・中将範世朝(藤原)

臣等参入、取御布施云々、

七日庚戌、晴、

八日辛亥、晴、立親王儀延引、

九日壬子、晴、入夜大雨雷鳴、今日典侍被着帶、相公羽林被入来、勸(藤原経子)

申盃飯、每事幸甚々々、(藤原基忠)

十日癸丑、朝間陰、入夜参大殿并前殿下、籠居之後、依吉曜所始出仕(藤原美雄女)

也、前殿御方御坐」角殿、北政所御産所也、入見参、世事有御談話、大

殿御坐西山觀尊王院御所、明日可有還」御、

(裏書)

十日下、

謁女房退出、自今夜即祇候持明院殿御堂御所、老母借給件御所」之

間令祇候、仍所馳參也、蓬屋構出之程、大略可令祇候云々、

十一日甲寅、陰、

十二日乙卯、朝間白霧、晴、

十三日丙辰、晴、

十四日丁巳、雨降、参吉田禪尼、向親時栗田口宿所、参近衛殿、参大

殿并前殿、入夜帰参御堂御所、

十五日戊午、陰、放生会、上卿西園寺大納言、参議、并、

御月忌如例、転読阿弥陀經、前殿密々有和歌御会、予進愚詠、後日可被

書番云々、

十六日己未、雨降、入夜月明、自今日潔済、奉転読法華經、

十七日庚申、雨降、(龜山上皇)上皇御幸西郊、

十八日辛酉、晴、

十九日壬戌、晴陰不定、

廿日癸亥、雨降、

廿一日甲子、晴、

廿二日乙丑、雨降、

廿三日丙寅、晴陰不定、(藤原兼頼)右中丞内々有御参、所申争日来不審也、

廿四日丁卯、晴、

廿五日戊辰、晴、

廿六日己巳、晴、

廿七日庚午、晴、

廿八日辛未、晴、(第三紙)

廿九日壬申、晴、

卅日癸酉、晴、右中并殿今日令出仕給、被申官方吉書、

九月小

一日甲戌、晴、院御燈、棟望奉行、(平)

二日乙亥、晴、参御所、女院御幸上野殿、(室町院)

三日丙子、晴、参御所、女院御幸嵯峨安嘉門院御所、(邦子内親王)

四日丁丑、雨降、今日二条宰相中将并舍弟中将等先歴覽吉田水閣、予

令会合、(藤原位下)女御殿御方下台所傾城三人令相伴、此後向東山龍護田、彼管

領之仁

(裏書)

四日、

為相公羽林之連枝、仍儲盃飯、(藤原房教)二位侍従来加、先於道場礼讃、一時、

次有数献之興、連句連歌又相交、絃管合曲、上下翻迴、雪之袖、面

々芸能大略所払底也、其興非一、今生之思出也、事終之後、已剋

被帰畢、予帰参持明院殿御所、

五日戊寅、晴、

六日己卯、晴、(第三四紙)

七日庚辰、晴、

八日辛巳、晴、

九日壬午、自夜雨降、辰剋以後属晴、重陽平座、(藤原)

十日癸未、晴、被行除目、頭内藏頭親朝朝臣奉行、

氏八講布施事、俊光相触之、於田中明神十烈者、依服假不触之、尤可然歟、

十一日甲申、晴、聞書到来、(藤原兼頼)弁殿令転任左中弁給、(藤原資宣)左大弁任中納言、一門之光華、所悦不少者也、聞書可統之、人々昇進驚耳目者也、

(裏書)

十一日下、

聞書

權中納言藤資宣

元參議左大弁、超上藤參議五人、此内平參議成俊、宰相中将四人具氏、具房・経良・冬輔等也、

參議同教良

元正二位左中将、一条故関白殿御息、多年籠居人也、此人有才芸之聞歟、可貴々々、

左大弁源具房

元參議右中将、而去中将遷大弁、定先例有之歟、珍重也、此人立才芸、於仗座右筆勤仕尤有便歟、

右大弁藤経長

當時服假身也、

右中弁平棟望

權右中弁藤定藤

左少弁源雅憲

右少弁平忠世

元五位藏人左佐□上、雅憲上■不任左弁如何、直

治部卿藤経俊

中納言兼官、

宮内卿藤頼親

參議兼官、

勘解由次官藤定光、

左近大將藤忠教

兼・九条前関白殿御息、

中將藤師良

少將藤公尹

故前左府息、

右近中将藤雅有

左衛門權佐藤高朝

元右

右衛門權佐藤為方

大理想、超越上焉

從三位藤原隆康

從四位下平棟望

同時転任叙四品、珍重也、

五位藏人

右衛門佐藤俊定

経俊卿息、

使宣旨

右衛門權佐藤為方・右衛門少尉藤原時長

雜任等済々、仍所略之也、

十二日乙酉、晴、被行御禊・行幸次第司除目、後聞、延引、

十三日丙戌、晴、參吉田殿、一兩日可経廻也、天王寺一切経会、院司範賢朝臣、參行云々、(一切経会、一衆会)兩会共奉行云々、

十四日丁亥、雨降、然而無程属晴、左中弁殿令渡三品第給、

(藤原経朝)

御禊次第司除目云々、

十五日戊子、晴、御月忌舍利講一座如例、參御墳墓、唱光明真言六十反、

転読阿弥陀経六卷、入夜礼讀一時、今日三位法印任憲入来、被勸一献、

山辺庄事、所令談義也、

(摂津國)

十六日己丑、晴、焼失之時文書等終日所撰定也、

(第三五紙)

十七日庚寅、晴、山辺庄申状、終日所致沙汰也、

十八日辛卯、晴、向歆喜光院内侍殿第、浴蘭湯、及晚帰畢、尚書殿同令渡御給、

十九日壬辰、雨降、

(×晴)

土御門院御八講、左中丞殿有御奉行、御教書等今日所書賦也、

廿日癸巳、晴、帰參持明院殿、尚書殿同御参、

廿一日甲午、陰、

廿二日乙未、晴、藏人左衛門權佐高朝昨日卯剋他界云々、殿下執事也、

彼連枝高俊朝臣・定忠、已三人有事、匪直也事也、可哀々々、早世之条

微運之至歟、定光一人相残云々、去十日転任左佐之後、所勞中日来不及出仕歟、不便々々、

廿三日丙申、天晴、自大殿被仰下云、中納言中將殿今年俄令献五節舞

(藤原兼忠)

姫給、舞姫装束」一具可有御訪由、被申室町院所被申子細也、其由即申大殿了、」

廿四日丁酉、晴、女御代女房装束一具、花山院前右府申請之間、為御訪可被沙汰遣、用途事、支配」御領等可申沙汰之由、自御所被仰下、支配事問答繁尚了、」

廿五日戊戌、晴、装束用途事、六条院領并本御領等支配之、下知両庁」

定親・資綱了、」

廿六日己亥、晴、今日撰政初度上表儀、家司忠世奉行、作者在匡朝臣、清書經尹、着座公卿左衛門督殿、」

氏御八講結願、任例沙汰送布施、袈裟衣一、捧物一、今日左中弁殿転任之後、」

(裏書)

廿六日下、」

令申吉書給、先人御転任左中弁之時、令申拝賀給、然而服」假中

(藤原経光)

拝賀無便宜之上、嘉禎二年先人御服假中令転任左」少弁給、件度不

及御拝賀、只被申吉書、今度被模此例、」雖有中少之差別、転任不

可相違之故也、先令参室町院給、以女房被申入、次御参撰政殿、

被内覧吉書、」

廿七日庚子、晴、撰政初度上表儀、」

日野田中十烈依服假不騎進之、」

晴、頭内藏頭親朝朝臣使者云、令補殿下執事、殿中事定有才学歟、不審事等」可相訪之由被命、予可参上之由答了、彼朝臣父祖不經之間、不

審多之由示之、」

廿八日辛丑、陰、大殿被申五節御訪薄様、室町院有御領状、其由申入了、」

十月大」

一日癸卯、晴、告朔之朝万事幸甚々々、」

二日甲辰、晴、」

三日乙巳、晴、安楽寿院御八講、資通朝臣奉行、公卿花山院大納言、

大炊御門宰相中将、右宰相中将、室町院有御幸、今夕可被行小」除目云

々、兩職闕競望者濟々焉云々、職事経頼奉行、」

四日丙午、霽、」

(裏書)

四日下、聞書云、」

權少外記清原良綱

兵部少輔平信輔

按察使藤実家兼、去左衛門督令遷之給、

左近中将藤冬実、信嗣卿息

左近衛中将藤実永公、泰卿息

右兵衛督藤実冬、令去中将遷

五位藏人 兵部少輔平信輔、故高輔朝臣子、無才芸無口伝跡露之者、立身一向太閤御吹拳之力歟、尤可然、超上嫡後嗣、親成、親業等、」

使宣旨」

左衛門權佐藤雅藤」



五日丁未、(第三七紙) 霽、寅剋上、(藤原兼朝) 路今出川有焼失云々、此御所頗咫尺、

六日戊申、(藤原兼朝) 晴、左中弁殿自今日令参候、龜山殿給、依便宜先御参此御所、

七日己酉、(藤原兼朝) 晴、土御門院御八講初日、於太多勝院被始行、左中弁殿御奉行、公卿・堂童子・僧名可尋記、

八日庚戌、(藤原兼朝) 陰、時々小雨、

九日辛亥、(藤原兼朝) 晴、

十日壬子、(藤原兼朝) 晴、維摩会、勅使并可尋記、後聞、南曹奉行権右中弁定藤下向云々、大嘗会主基事、(平) 右少弁忠世奉行云々、

十一日癸丑、(龜山上皇) 晴、御八講結願、上皇御幸西郊云々、入夜弁殿令帰河東給、

十二日甲寅、(藤原兼朝) 晴、

十三日乙卯、(藤原兼朝) 晴、

十四日丙辰、(藤原兼朝) 晴、侍中来、勸一献、今日精進也、入夜参吉田殿、念仏、

子時、勤仕之、

十五日丁巳、(藤原兼朝) 晴、御月忌舍利講如例、参墳墓、唱光明真言、転読阿

弥陀經六卷、(行脱力) 不断念仏辰子兩時勤仕之、

十六日戊午、(藤原兼朝) 陰、被小除目、大嘗会功人少々被任之、堅固雜任等也、

典侍一人、(藤原兼朝) 掌侍一人被任之、撰政殿内舍人隨身御慶申云々、

十七日己未、(藤原兼朝) 晴、吉田今長谷観音堂供養、在地人勧進諸壇結構之、有

舞態云々、(藤原兼朝) 入夜帰参持明院殿御堂御所、

十八日庚申、(藤原兼朝) 晴、風烈、異国賊徒等来着对馬島之由有風聞云々、鎮西

使者、已下向関東云々、

十九日辛酉、(藤原兼朝) 晴、今夕行幸官司、職事信輔奉行云々、大嘗会御禊料云々、

廿日壬戌、(藤原兼朝) 晴、朝霜太、

廿一日癸亥、(藤原兼朝) 晴、参御所、入夜先参吉田殿、次向勘解由小路三位第、

子息左馬権頭、(藤原兼朝) 明日供奉事、為扶持也、今夜即所一宿也、

廿二日甲子、(藤原兼朝) 自夜雨降、已剋以後雨脚漸休、天顔猶陰、今日大嘗会御

禊也、(藤原兼朝) 甚雨不休者、可及予儀之处、忽止之間、今日所被果遂也、

旦經尹出立、予所加扶持也、令沙汰立之後、与三品同車、於二条、京極

立車見物、今日幸路立見物車可禁制之由有其說、仍、於二条面辻子固武

士後密立之、見物無不足者也、上皇任代々例、以晴儀可有御見物、(今度不)

被立御車、上達部・殿上人等同為轎屋、(被立御車) 而依

異国事、俄自昨日停止云々、(少志) 去十三日於对馬島筑紫小郷代官凶賊等合

戰云々、依此事資能法師、差遣飛脚於関東云々、興盛之沙汰驚遽無極者

也、我朝神、(少志) 国也、定有宗廟之御冥助歟、可貴者也、申斜御輿令、渡大

路給、依雨千乘万騎等有猶予歟、及数剋云々、今日事、藏人、

次官経頼奉行、前後行烈面可尋記、隨見及大概所記、付也、日没之程

帰華三品第、

節下、(藤原師忠) 右大臣殿、(藤原師忠) 官人番長、(藤原師忠) 蜜絵装束、張綱前行、

以下一行も「八藏人」の前にあり、原本の指示に従ってこれを正す

少納言

重通朝臣、(藤原経朝) 頭綱

公卿

後聞、馬驚唐鞍之間不棄用、以車參公願宮云々、

土御門大納言定実  
(藤原)

西園寺大納言実兼  
(藤原)

左大將殿忠教  
(藤原)

源康長

右大將殿家基  
(藤原)

左衛門督殿実家  
(藤原)

土御門中納言通教  
(藤原)

佐頭範  
(藤原)

堀川中納言具守  
(藤原)

洞院中納言公守  
(藤原)

德大寺中納言公孝  
(藤原)

尉藤仲綱

同致有

三条三位中將実重  
(藤原)

已上馬副張口、唐鞍任例、

次將

左中將公敦朝臣・宗親朝臣・伊定朝臣・公行朝臣・公綱朝臣  
少將資邦朝臣・季顯朝臣・見九  
(藤原)

右藏人頭(藤原)・實時朝臣・信基朝臣・雅持・親平  
少將資行朝臣・實永朝臣・保藤朝臣・雅持・親平  
(藤原)

將監中原知益次將等付杏葉事、人々所為不同、彼作法  
不審也、可尋決、

左衛門府

督代前左京大夫邦仲朝臣・經衛府四位勳之、其体如常、衛府  
不召具、隨身之許也  
(藤原)

佐顯家  
(藤原)

權佐雅藤・廷尉之後、今日申拝賀間、供奉行粧如常、火長着冠  
連着平鞆(無綱)、付杏葉  
(藤原)

大尉章澄・檢非違使  
(藤原)

少尉中原章繼・惟宗盛能・橘成説・藤章澄・惟宗盛賢  
(藤原)

右衛門府

督代右京大夫隆博朝臣  
(藤原)

佐俊定・五位藏人・着染裝束、其色遠見之間不分明、小舍人童二人召具之、  
二藍狩襖(付色々菊枝、其体美麗也、  
(藤原)

權佐第三九紙、別紙紙紙  
(藤原)

權佐為方・廷尉之後、初度供奉、行粧如常、

尉安倍親顯・廷尉

左兵衛府

督代隆良朝臣  
(藤原)

權佐重經  
(高階)

右兵衛府

督代顯名朝臣  
(藤原)

尉藤泰澄

左馬寮

權頭經尹

允藤以雄

右馬寮

助遠經  
(高階)

八藏人

藏人勘解由次官經賴  
(藤原)

大膳亮橘以任

橘知邦

女御代

花山院前右府女・承毛車、出軍已下可尋記、  
前驅仙洞上北面被備渡云々、  
(藤原通雅)

裝束司

長官中納言藤原經俊

判官三善重能  
右少史

主典紀業弘

源康長

佐頭範  
(藤原)

尉藤仲綱

佐為実  
(藤原)

助淳清  
(藤原)

允藤原為昌

兵部少輔信輔

菅原在頭

源盛兼

次官右中弁平棟望朝臣

菅原在賢少内記・式部丞

大江宗仲

次第司

御前

長官

権中納言右衛門督藤原経任（第四〇紙、別紙總題）  
檢非違使別当、  
手振・馬副等行概照光華、天下頭職無比類者也

次官

菅原在守式部少輔

判官 清原康重

安倍親職

主典

紀在弘

清原憲貞

御後

長官

参議右兵衛督藤原実冬（安絵隨身六人、手振・馬副等如常）

次官

藤原通俊

判官 藤原宗連

同光胤

主典

高橋親職

紀俊弘

撰政殿御供奉

内舍人隨身二人、左右番長二人、同府生二人

馬副八人、

頓宮上卿

新中納言資宣

行事弁

棟望朝臣

着御頓宮大略日没以後也、子剋許還幸、官庁今日の儀無為無事、聖運

之令然、尤可貴者也、当日雖雨休、臨期休、可謂珍重、（異筆・降殿）

廿三日乙丑、晴、曉更帰参持明院殿、（第四三紙）

廿四日丙寅、晴、（第四四紙）

廿五日丁卯、晴、自官庁還御二条殿、信輔奉行、

廿六日戊辰、晴、

廿七日己巳、晴、左中丞令渡給、予付驥尾参吉田殿、

廿八日庚午、晴、山辺庄陳狀事、所致沙汰也、

廿九日辛未、陰、異国賊徒責来（時定）興盛之由風聞、關東武家辺騒動云

々、或説云、北条六郎并式部大夫時輔等打上云々、是非未決、怖畏無

極者也、

卅日壬申、晴、

十一月大

一日癸酉、晴、告朔之朝幸甚々々、入夜参持明院殿、謁頼泰、依異国事（高階）

被停五節了由相談、謁宣旨局談往事等、

二日甲戌、晴、依異国御祈、被発遣山陵使八陵、自仙洞被立之、院司右

衛門権佐為方（藤原）奉行、告文勅草、使并次官在裏、

（裏書）

二日下、

橘列（唐）

新中納言資宣（藤原）

判官代

宮内権大輔俊光（藤原）

山階（神功皇后）

治部卿経俊（藤原）

（又次官）

新少納言範尹（藤原）

大内（宇多天皇）

権中納言具守（藤原）

（又次官）

兵部大輔経有（平）

円宗寺（後三条天皇）

参議冬輔（藤原）

（又次官）

民部大輔仲兼（藤原）

法住寺（後白河天皇）

参議実冬（藤原）

（又次官）

左衛門佐頭家（藤原）

大原（後鳥羽天皇）

正三位邦経（高階）

（又次官）

左兵衛権佐重経（高階）

金原（土御門天皇）

修理大夫藤隆康

（又次官）

出羽守菅原在久

淨金剛院（後嵯峨天皇）

別当経任（藤原）

（又次官）

右衛門権佐為方

（第四五紙）  
三日乙亥、陰、時々雨降、



十七日巳丑、「晴、依異国事、被停止五節、廢朝以後政始、」

今日行幸官司、国司除目、

十八日庚寅、「晴、依異国事、大嘗会以略儀被行之、悠紀行事左少雅憲、<sup>(源)</sup>

主基事」右少忠世奉行、藏人方事俊定奉行、今度被行事等可尋記、大

嘗会叙位可尋記、

(裏書)

十八日下、

被行大嘗会叙位、

十九日辛卯、「晴、大嘗会廻立殿行幸、両国標山被引之、供奉人可尋記、

明後日清暑堂御神樂可被停止云々、

廿日壬辰、「晴、節会等今日被縮行云々、其儀可尋記、

<sup>(藤原兼頼)</sup>左中丞殿御下向天王寺、明日五智光院灌頂、院司闕如之間、俄御下向、

予所伴参也、

廿一日癸巳、「晴、昼間不及巡礼諸堂、所休息也、今夜灌頂也、大阿闍

梨覺憲僧正、讚衆廿口、阿闍梨十口率参之、今十口寺僧等云々、事畢

院司令取阿闍梨布施給、

(裏書)

廿一日下、

主典代・庁官参、院司座五智光院西面庇副欄寄北敷之、階以北<sup>南上</sup>

東面、寺家儲之、灌頂儀如常、深更事了令帰宿所給、無殊儀」者也、

於西門唱念仏、疑信心者也、

<sup>(第四七紙)</sup>廿二日甲午、「晴、後夜鐘以後、所出京也、立入今津人屋、昼駄餉、西

斜帰参吉田宿所、

廿三日乙未、「晴、

廿四日丙申、「晴、

廿五日丁酉、「晴、未剋白川今辻子有火事、無程消了、

廿六日戊戌、「晴、

廿七日己亥、「晴、

廿八日庚子、「晴、

廿九日辛丑、「晴、霜厚無地、

卅日壬寅、「自夜雪降、無地六七寸、呈豐年之瑞牆上、東山四林如見花、

賞翫之外無」他、依憚停止神祭、御堂御八講、家司光顯奉行、当日定、

十二月大

<sup>(第四八紙)</sup>一日癸卯、「晴、宿雪埋庭、告朔之朝幸甚々々、

二日甲辰、「晴、

三日乙巳、「晴、後聞、今日関東使者秦四郎入道参近衛殿<sup>(藤原兼平)</sup>大藏御方、以待

被召之、直御問答、被謝遣之、定含重事歟、殿中吉兆之先表歟、尤可悦、

其趣人不知之、不審千万々々、

四日丙午、「晴、

五日丁未、「晴、謁兼忠法印談山辺庄事、祇候一条殿僧房、所参彼也、次謁

泰俊、次謁女房宣旨局、次謁勘解由小路三品、条々所密談世事也、<sup>(藤原経朝)</sup>

六日戊申、「晴、

七日己酉、「晴、賀茂臨時祭、職事信輔奉行、使中院三位中将通雄卿、<sup>(源)</sup>

舞人、  
、

八日庚戌、朝間雪飛、

九日辛亥、雪續紛、今日上皇被供養御持仏堂、檜皮葺堂一字、御本

尊心字一体、以銀作月輪、以金心字ヲ打テ付之、範誓法印奉御定由、  
為

(裏書)

九日下、

密儀、不及公卿着座歟、御願文在通朝臣草之、御導師定円、法印云

々、大理所奉行也、

十日壬子、晴、大殿有御吉事、可被知食万機由天下謳歌、頗所有其憑

也、承久猪隈殿、宝治岡屋殿、此兩度進関東使者申可有御吉事之由、

相似彼二代佳例、可憑々々、

十一日癸丑、晴、謁女房宣旨局并業行、世上不審事所密談也、

十二日甲寅、雪飛、撰政第二度御上表、向白川三品第、

十三日乙卯、雪飛、埋地一尺余也、近曾未見及、

被行大嘗会女叙位、

十四日丙辰、晴、庭上雪不消、催興者也、

十五日丁巳、陰、寒氣太、御月忌如例、參墳墓、光明真言二百反、阿

弥陀經六經、念仏六万反、為今日之所作、

十六日戊午、晴、内侍所御神樂、頭中将奉行、

十七日己未、晴、

十八日庚申、晴、及晚陰、雨降、

十九日辛酉、晴陰不定、雪飛、被始行京官除目、頭内藏頭奉行、為兩

夜儀、參仕公卿、可尋記、執筆左大弁、新院仏名、忠世奉行、

廿日壬戌、朝間雪、及五寸、京官除目竟也、依撰政初度為二夜儀、

後聞、今夜、信輔、經賴除目荒出之間、兩人被召怠状云々、不便々々、

廿一日癸亥、晴、向堀川大納言第、所申合山辺庄事也、以淳俊条々事

被問答、次參前殿下、数剋人見參、次參持明院殿、拜老堂、帰吉田宿

所、叙書無殊事、頗令然也、

(裏書)

廿一日下、

左京權大夫大江重房、民部少輔賴藤、甲斐守平仲兼、

国司所申任子息也、然珍重也、

廿二日甲子、雨降、万機旬、奉行職事可尋記、親朝朝臣、

自今日被始行円宗寺法華会、左中弁殿御參行、上卿新中納言、

廿三日乙丑、朝間陰、已剋以後迎晴、

廿四日丙寅、晴、謁帥卿、山辺庄事所申合也、參前殿下、次謁中将忠

光朝臣、山辺事兩槐門、辺可伝申之由示合之、

廿五日丁卯、晴、向歛喜光院、相伴内侍局、參持明院殿、今日弁殿小

兒三歲食始魚味、如法密儀也、典侍局令含給、幸甚々々、參御所、謁女

房、年始、片吉書并御祈始奉行院司事可申定也、

(裏書)

廿五日下、

可覽片吉書之院司資通、基光等朝臣間、可相催、御祈始事、兼仲

雖服假、更不可有苦、可申沙汰由有御定、承之由申入退出、今夕即宿侍」御堂御所、

廿六日戊辰、晴、参前殿下、数剋祇候、於御前有連句御会、小時帰参持明院殿、参御所謁」女房、及晩帰吉田宿所、卯剋一条大宮有炎上、馳参御所、無程消了、

廿七日己巳、晴、間陰、

廿八日庚午、晴、自今日始北野精進、

(第五)紙(未脱)  
廿九日辛、晴、

卅日壬申、晴、参北野聖廟、宮廻、小時帰吉田宿所、転読心経三百五十四卷、

及晩参墳墓、唱光明真言、

(具注曆署名)

文永十年十一月一日 従五位上行陰陽大允賀茂朝臣在重

正五位下行権曆博士賀茂朝臣定員

正五位下行陰陽少允賀茂朝臣在臣

従四位下行曆博士兼長門介賀茂朝臣在秀

従四位下行漏尅博士賀茂朝臣在員

従四位下行権陰陽博士兼丹後介賀茂朝臣在統

(奥書)

正和五年後十月十一日、肝要等取目六了、

(藤原光兼)

左司郎(花押)

(紙背奥書)

元亨元年七月九日委」取目六了、

(藤原光兼)  
前参議(花押)

正平二年四月廿一日、重」一見了、

(藤原光兼)  
前参議(花押)

(国立歴史民俗博物館非常勤研究員)





[illegible]

卷尾

(第51紙)

[illegible]

紙背  
奥書

(第51紙)



紙背  
文書

(第42紙)



(第40紙)



(第39紙)





(第38紙)



(第25紙)



(第24紙)



(第21紙)

(第22紙)

